

黒岩重吾 | 背徳の伝道者



背徳の伝道者

定価五二〇円

昭和四十六年七月二十日印刷
昭和四十六年七月三十日発行

著者 黒岩重吾

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四

©一九七一 検印廃止

目次

幻の遍歴

5

蒼ざめた名札

41

とけない霜

95

背徳の伝道者

157

裝幀
村上
豐

小説集

背徳の伝道者

幻の遍歴

私は二十年近い昔、全身が動かなくなって中之島公園の傍の病院に入院した。この間のことは、小説にも書いたし随筆にも書いた。

だが今思い出して見ると、まだまだ書いていない人達がかなりいるようである。

私は運動神経が麻痺したので神経科に属していたが、その病院では、精神病患者やノイローゼの患者達も同じ神経科になっていた。

私は五年近く入院していたが、入院して三年位になると、松葉杖なしでも、ステッキ一本で何とか歩けるようになった。

当時の私の生活は、昼は同じように運動神経の麻痺した患者達と碁を打ったり、病院を脱け出してパチンコに行ったりしていた。

そういう点で、神経科の科長は、患者達に対して割合放任主義だった。私は夜になると良く看護婦の詰所に行って小説を書いた。

当時は、退院しても、まともに働ける身体に回復することは不可能だと思っていたので、作家以外に私の生きる道はない、と悲愴な思いであった。深夜に、看護婦の詰所で小説を書いたのは、そ

の病院に勤続三十年以上という婦長の好意による。

私の部屋は健康保険部屋で、一部屋に四人いた。隣りとのベッドの間はカーテンで仕切られて、だけの狭さで、到底、小説など書ける状態ではなかった。

病院の外から、私の部屋を訪れる者といえば、母と、株の失敗で損害をかけた某証券会社の社員だけであった。

五十年輩の大人しそうな人物で、彼は時々、私の様子を見に来た。勿論、少しでも私に支払能力があれば、損害を弁償して貰おうという気持であった。

彼は三月に一度位やって来た。

彼が来ると、私はベッドに横になったままの状態で、すみません、といった。

すると彼は、気の毒そうな表情で、

「いや、分ってるんですよ。ただ、課長が、時々行ってこいというもんですから」

と弁解するようにいうのだった。

そして彼は、黙り込んだまま、二三十分椅子に坐り、煙草を二三本吸うと、お身体をお大事に、とつぶやくようにいつて帰るのだった。

それから間もなく、その証券会社も破産し彼は来なくなった。

私を訪れるのは母だけになった。株で失敗したため、住んでいた家は売り払い、母や弟妹は借家住居になっていた。

私の衣類を洗濯にやって来る母の顔は疲労し果てていた。幸い母は茶華道を教えていたので、時

たま僅かな小遣を私にくれた。

そんな小遣が入ると、私はステッキをついて街に出て、パチンコをしたり、喫茶店でコーヒーを飲んだりした。

楽しそうな男女を眺めながら、私はこういう喫茶店で毎日コーヒーが飲めたら、どんなに楽しいことだろう、と思ったものだ。

私は怠惰な性格である。少年時代から勉強が嫌いで遊ぶ方が好きだった。私はストイックな生活に耐えられなかった。そんな私が、作家になれたのは、矢張り五年近い全身麻痺という闘病生活があったおかげだろう。

病名は一応、脊髄灰白髄炎せきずいということになっている。俗称、小児麻痺だ。

遊び好きの私は、勿論女性も好きだった。今では体力も衰え、若い健康な女性を見ると好き心よりも、先ず庄倒されるが、若い頃の私は、普通の男性よりも、好色だったように思う。

私が病院を退院し、釜ヶ崎に行つて、それから半年位たつてキャバレーに勤めたのも、就職口がそこ以外なかったせいでもあるが、心の何処かに多勢の女性に接していたい、という欲求があったためである。

丁度入院して三年半位たった頃、私の隣りに二十七八の女性が入院した。隣のベッドだから、カーテンを開けると彼女と話し合うことが出来るのだ。

名前は一応高浜奈美ということにしておく。奈美は色が白く丸顔で身長は五尺二寸位あった。眼は小さく、鼻もそんなに高くはない。ただ唇の恰好だけは肉感的だった。

奈美が入院する前にいた患者は、中年の工員で、日曜日になると同じ年輩の細君がやって来て、家計の話ばかりしていたので、私はうんざりしていた。奈美が入院して、私は生き返ったような気持ちになった。三年半も病院にいと、神経科病棟の主に近い。

私は早速、看護婦から、奈美の病気を聞き出した。途端に私はがっかりした。

軽い分裂症の患者だ、ということが分ったのである。

分裂症といえ、幾ら軽くても、精神病患者であった。そういえば奈美は、私が話し掛けても、余り返答しない。それに、顔に表情が現われないのだ。私に好感を抱いているのか嫌っているのか、さっぱり分らない。

それでも私が朝食の時、カーテンを開けて、お早よう、というと、

「お早よう御座居ます」

と一応挨拶は返すのだった。取りつく島のない感じで、私は仕方なくカーテンを閉じるのだった。ただ、奈美は若い女性だけに朝起きると化粧をする。薄化粧だが、仄かな香料の匂いが漂って来て、私の欲情を刺戟する。

私は更に看護婦から情報を仕入れた。

それによると奈美は、機械器具を扱う、中小企業の女事務員だった。発病の原因ははっきりしない。中小企業なので、社長秘書のような仕事もしていたらしい。

社長という男は、一度だけ見舞に来たことがあった。五十年輩の如何にも精力的な感じの男であった。

「元気になったらまた戻るんや」

と社長がだみ声でいった。その太い声が私には何故か、印象的だった。それに対して、奈美は低い声で何か答えたが、聞き取れなかった。

病気が病気なので、会社からの見舞客は殆どないようだった。ただ、奈美は、私と同じ大部屋に入ったのだから、病症はごく軽度で、それに金銭的な余裕がないことだけは確かだった。

大部屋の患者は大抵健康保険で入院している。私も株の新聞社の健康保険を使っていた。

奈美には母親がいた。年齢からいって、五十近い筈だが四十前後にしか見えない。

口紅など塗って、奈美の見舞に来ると、私のところにも顔を出し、ケーキや果物など、くれるのだった。この母親はなかなか話し好きだった。

私のところに来ると、私の病状や、原因、それから家族のことなど、色々と尋ねるのだ。

ケーキを貰うのは有難いが、私はいささか、この母親には辟易した。

母親の話で保険の外交員をやっていることが分った。母親は何故か私に好意を持ち、奈美が小学校の頃、夫が死亡し、後は自分の手一つで奈美を育てて来た、と話すのだった。

「それがこんな病気になってしまつて」

最後になると母親は必ず嘆いた。

或る日、例のように、母親が私のところに来て喋っている時、カーテンの端が微かに動いたのを私は感じた。何気なくその方を見た私はぎょとした。カーテンの隙間から、奈美の顔がこちらを覗いているのだった。普通なら、覗き見しているのだから、私と視線が合うと、奈美の方が慌てて

顔を引つ込める筈だが、奈美は眼をそらさない。

それまで私は、奈美に精神病患者という印象を余り受けなかったが、この時だけは、それを強く感じた。視線を外らしたのは、私の方だった。母親は気がつかない。

相変らず喋っている。

「済みません、少し疲れましたので」

と私はいった。それで、母親は重い腰を上げた。本当にお邪魔しまして、といって私を見た母親の眼には、妙な艶っぽさがあつた。

この母親の眼を、私は最近感じ出していた。これは五十歳近い女の眼ではなかった。

母親の名前は、美代子としておこう。美代子は看護婦から、私が作家志望なのを聞き出し、最近では小説の話などもする。自分も女学生時代は文学少女で、小説を書いたことがあるなどといわれると、私は苛々した。

はつきりいって、私が或る程度、美代子を迎え入れたのは、美代子が持参するケーキや果物のせいだった。私は金もなく、病院の給食だけで我慢しなければならない。

私は精神的だけではなく食べものにも飢えていたのだ。私は、深夜の空腹に備えて、ケーキの半分だけは残しておく。先に半分を食べるのだが、新聞紙の上にケーキを置き、ナイフで半分に切る。そして新聞紙に落ちたケーキの破片を口で吸い取るのだった。

そんな時私は、奈美に見られないように壁の方を向いていた。それから右手でケーキを掴むと、左の掌でこぼれないように受けながら、鼻孔に持つて来て、匂いを嗅ぐのだった。

美代子は顧客の家に行く時、良くケーキを持って行くのだろう。保険の外交員にしてはそのケーキは上等だった。甘いクリームの匂い、バターや砂糖、蜂蜜の匂いを私は嗅ぎ分けることが出来た。飢えというものは浅ましいものだ。私は思い切り匂いを嗅ぎ、唾液を口中に溢れさせてから少しずつ味わいながら食べて行く。これはケーキだけではない。果物だって同じだった。林檎を食べる時、私は皮はむかなかった。歯で皮をむくようにしながら食べるのである。

だが、私が美代子と話しているのを奈美が窺っているのを知ってから、私は美代子が持って来たケーキを食べる時も、奈美が覗いているのではないか、という疑いを抱き出した。だから私は、時々振り返ってカーテンの隙間を見たが、奈美の視線は感じられなかった。

とすると、奈美は、美代子と私が喋っているのが、酷く気になるのかもしれない。

私は何となく、奈美の発病の原因は、美代子にあるのではないか、という気がし始めるのだった。

二

奈美は美代子の本当の娘だろうか。だが、美代子は、夫が死亡してから再婚もせず、自分の手一つで奈美を育てたという。実母でなければ出来ないことだった。

奈美は散歩も許可されている。安静時間が終ると夕方、中之島公園に散歩に行ったりしている。だから、私も彼女を追ひ、話し掛けるチャンスは幾らでもあるのだが、それをしなかったのは、精神分裂という病名にあった。それが私の気持を押えていた。

私は何も奈美を軽蔑しているのではない。私だって杖を持たなければ歩けないような小児麻痺患

者だ。私が歩く姿を見る通行人の眼には、同情と好奇心、なかには輕蔑もあるのだった。その点、奈美が歩いていても、そういう視線はない。

私が奈美にしつこくしたくないのは、それによって、奈美の症状に变化が起るのを怖れていたからだった。

間もなく晩秋がやって来た。御堂筋の銀杏の葉が黄金色に染まる。当時は、中之島の川には、高速道路も通っていないければ、川をさえぎる防水堤もなかった。石炭を積んだ船が病院の前の橋の下をくぐって行く。

私は碁に熱中していたが、腕が上達しない。大体、五六級の実力なのだが、それ以上、どうしても上らないのだ。その日の昼間、高岡という脊髓癆ろウの患者と碁を打ったが二連敗した。脊髓癆は俗称梅毒である。高岡の場合は、古い病気で両足が不自由だった。だから松葉杖をついている。私は頭の熱をさますため病院の外に出た。病院の前から、中之島図書館に通じる石の橋の上に立った。私の姿は、古びたズボンに、ぼろジャンパーという姿だった。入院中は殆ど、これで通したのだった。

図書館の隣りには大正時代に建てた大阪市の中央公会堂がある。これは当時の北浜の株屋だった岩本栄之助が、百万円を寄付し建てたのだ。だが彼は中央公会堂の建築が始まる頃、株で失敗し、ピストルで自殺した。私が入院している病院で息を引き取ったという。

川は静かだった。ふと見ると川べりで、和服姿の女性が腰をおろし、本を読んでいた。奈美だった。今まで、奈美が本を読んでいるのを見たことがない。多分、神経科の科長から読書の許可が出